

大正十年

一月元日 天気晴朗旭日粲然として佳気天に満つ。図書室に鎮座まします大鏡餅と奥田君の揮へる新年之佳気看雪中の大書とは殺風影なる舎に新年気分を表ハセリ。

三日 舎長宮部先生の御宅へ招待に預かり興味深き写真を拝見し御馳走になりカルタをとって面白く興じ合ひ十二時頃帰舎す。

四日 北村さんの御宅に招待さる、又々参々御馳走になり十二時頃帰舎す。享樂的御正月の気分、漫々。

五日 亀井さんの御宅に御招待に預る。毎日御馳走征めにて気まゝな気分じゃが全く食傷の気味也。

廿日 旧文藝部員より引き継をなす。前々の競賣々上金合計五円六十錢也を受取る。内訳は、鈴木誠君五二錢、山縣君七四錢、山内君五八錢、山田君五一錢

太田君四三錢 渡辺君三八錢

山口君三〇錢 松本君四〇錢

太田君五五錢 笹部君三七錢

小林君四一錢 以上合計金五円八九錢ノ内より旧文藝部委員が文藝部への貸金々二十九錢を減じたる残金金五円六十錢也とす。

卅日 月次会を開かる。四時三十分より牛鍋を以テ初る。この日鬪論会を行ふ。論題吾等の進むべきは南か北か。

先ず南進派のプロパガンダを以て初る

山縣君南進派の先陣を承り南米と日本内地の人口比較より天産物に説き及す。北進派の先陣鈴木誠君次で表れ北方の天然物特に漁業につき論ずる処あり。

南進派渡辺君南国は只何となしに憧れの地なりと論じて帰れば北進派山内君表れて大に北方の大自然を論ず、南進派岡田君我が国民は元其ノ源を南方に発ス云はる。

而して今や將に里帰りをなすべき時なり。

又寛永前の我國民の發展を見よ云々と論ずる処あり、北進派赤井君萬一平和破れたる節は我が國民の食料を如何にすべき北海の海には罐ずめの原料に富めりと論ず。

南進派小野君日米戦争を基にして南洋開發の必要を論じ北進派山田君スオトの上より南北の比較論を試む南進派松本君南方の茶をふりかざして奮戦すれば北進派山口千君特意

(及異)の辨を以て政治上より北方の重要なるべきを論ず、南進派小林君南洋は生活費安くして且つ土地広く吾人の容易に發展し得べき地なりと論じ去れば北進派太田君北海の漁業を論じ吾人が当北海道大学に入学せるは北進を目的とせしものに非ずやと論ず、戦今や■なり血沸き肉踊るの白兵戦。

此の時南進派笹部君時来れりと駒を陣頭に進めたり、北守南進は目下の急務なり、天産物に関し南方が北方に過ぐる事廿倍に餘れるを知らずやと気焰虹の如し。北進派中村君表れ北方は頭腦を要する事多し、南方へは頭ノ悪き人も發展し得と皮肉りたるつもりにて論ず

今は是迄なりとや思ひけむ味方が喝采敵が彌次の中に南進派鈴木君（貞）出馬に及び前各敵手の論を一々反■を加へ南洋南米の幾多の天産物を如何にすべきと論を結べば北進論者奥田君南方は天産物に富みたれど精神の伴はざるは印度の亡国により知らると論じて此の戦ノ句を結べり。

最後に議長宮部先生より戦の勝負互格なりとの御批評を給はる、北と言はず南と言はず至ル処に発展すべし且移民せん人は外交官位の心掛けを要するとの御注意あり、他に亀井氏の来席せらるゝありしも時間の関係上御話はなかりし。

当日の委員諸君は渡辺国雄君、松本卓君、小林作五郎君、赤井英吉君なり。

午後九時山口九郎君一身上の都合にて帰国せらる。

二月四日 午後十二時青森より水産得業士渡辺文雄様来舎せらる

五日 夜同氏より御土産の饗応あり。

二月八日 午後五時より副舎長室にて木村医師の健康診断あり。

九日 渡辺様青森に帰らる。

十一日 午前九時、宮部先生石沢様川村様亀井様の御参列を願って舎の前のポンドにて卒業生記念写真を撮る。北村様が少し後れて来舎せられたは非常に残念なり。

十時半よりピンポン大会を開く。

十二日 午後二時より帝国製麻会社へピンポンの遠征に行く。遂に我舎の勝利に帰す。

明日渡辺君帰国さるとか夜舎生一同特別室に集りて渡辺君の為にコンパを開く、君の健康を祈らん為なり。

十三日 午前九時三十五分渡辺国雄君病の故を以て帰国せらる。君は誠に前途多望の士、一日も早く健康を廻復せられん事を祈りて止まず。

十九日 夜山内和三郎君退舎せらる。二人同室なる事、勉強が出来ざる事等を理由となす。

廿六日 退舎生送別会あり、会次々の如し。

一、開会之辞 一、送別辞 舎生有志 来賓諸氏、亀井氏、後藤氏、河村氏 一、退舎生挨拶 赤井英吉君、鈴木貞雄君

一、舎長訓話 一、閉会之辞

茶菓、この日舎長及亀井氏には舎生と晚餐を共にせらる。

三月十二日 山口九郎君近日受験の為上京せらるゝに付き午後九時より特別室にて送別会を開く、舎生一同君が健康と成巧を祈れり。十時散会

二月某日濠廬集、道草（漱石）象牙ノ塔ヲ出テ（白村）以上三冊購入せり、迷路（武郎）以上一冊大小島様より寄贈せらる。

三月十四日 山口九郎君受験の為上京せらる。

廿三日、離別会を開く、天井すしを以て満腹の悲哀を感じしめアイスクリームを製造して而も五郎八茶碗に御代りを為さしめたるは末聞の上出来。抽籤演説をなす。来賓なし。亀井氏が終り頃一寸見えらる。

当日の委員は笹部君山田君山縣君山口君代理岡田君

委員の改撰あり、文藝部奥田君運動部山田君食事部山縣君衛生部松本君会計部小野君
四月十四日馬場常次君退舎、午後九時東京に出発せらる。同君は本大学を退学し東京帝
大に志されたる也。

廿日 小林君今朝帰舎さる、四国関西方面の旅行をされし由。

廿一日農学実科一年長谷川静雄君、予科一年英時田郇君入舎せらる。

廿二日、山口九郎君帰舎。

廿三日 夜十一時松本君帰舎例の如き元気なり。

廿六日夜山口九郎君兵隊検査のため上京。

廿七日 夜、山口千之助君帰舎さる。舎はいよ※※にぎやかさを加ふ。

五月九日 夜、木居、多勢両君入舎せらる

十日 矢田君入舎せらる

十六日 松島君入舎せらる

二十四日 今井君入舎せらる

二十八日 歓迎会を行ふ、委員左の如し、

山口千君、山藤君、山田君、鈴木誠君

新しい入舎生を数名迎えて部屋も賑ふ中に愉快なる歓迎会を行ふ、来賓として亀井、後
藤、河村の諸氏御出席下さる。

六月四日 本邦を代表したる植物学者として舎長なる宮部先生は米国に赴かる事となる。

その為の送別会を開く、来賓としては河村、後藤、北村、亀井の諸氏御出席ありて如何
にも盛大なりき。只石澤氏病気の為め御出席あらせられざりしを遺憾とす。委員は左の
如し。

笹部、矢田、山口九郎、長谷川君の四名とす。

当日は舎長宮部先生より拾円、河村氏より二円五十銭、亀井、後藤両氏より各一円五十
銭の寄附金ありたる。

六月九日 舎長宮部先生夜九時の急行にて札幌を御出発になる。見送る人山の如し。

二十七日 北の国の大自然を慕ひ、且つ遠大なる望を抱いて当地にやって来た長谷川君入
舎して以来謹直にして運動も熱心に行へるが常に深き考慮にある事は誰しも認めたる処
なりしが、遂に氏は最後の決断をなして自己の万足する生活を送るは文科より他なしと
皆に別れを告げて遠永に此の地を去らる。

元来此の舎より斯る突然的雄々しき決断をなして飛び出すもの多し、北の自然は斯くな
さしむるか舎そのものはかくししむるか、不思議なり

長谷川の書き残せるもの

「何物にもまして「眞面目」と「反省」とをむねとすべきではないでせうか、お互に許
し合ひませう、そうして吾等が目がけてゐる「偉大」に向つて突進ませう。「偉大」は
神の何たるかを知る、そうして「偉大」が物事の総ての真理を知る。本当さを知る、心
髓を知る、この意味に於て僕は名残惜しき此の舎を出ます。偉くなる為めには小さな情

を捨てなければなりません、さらば本当に懐しき諸君よお互に偉くなりません、偉くならなければ生くる甲斐はなし、死あるのみ。

諸君へ 静雄より

二十八日 思はざる火災に罹りたる成田君こそ気の毒な次第なり。試験は二日より始まるのに、筆記や本を皆なくしたるは、假入舎せられたり。

七月三日 午後四時の汽車にて岡田、山口千君内地旅行の為出発さる

七月九日 試験も終りて愈々夏休みとなりたり、各々帰省する事なれば離別会催さる、離別そのものは悲しみの象徴にしても当夜も沈痛さを感じず、来賓として亀井、北村の両氏御出席下さる。

二十日 松本、山口の二君、樺太見物に出発す、舎前にて記念撮影、威風堂々舎門を出ずれば背後に聲あり「ステーキ※※」往来の人々顧みて目送…朝食あり。

二十一日 朝十一時にて中村、矢田両君根室の牧場に向って出発す。

二十五日 今井君帰省す、いよ※※もって舎の内はガラン堂、留守居を承る拙者こそ淋しきことの極なれ、北斗燦たる楡都の空、流星遙に飛んで南方に消ゆ、嗚呼痛ましむる哉遊子の心、チェッ、これも修養ジャ※※。

八月七日 六時の列車にて根室釧路旅行を了へて中村君、矢田君帰舎す、久し振りにての札幌は又なく好き哉 根室地方の陰うつさに引かへて晴々したる札幌は実に北海道の首都なりとの感を深くす。札幌も最早やハモニカ、も始めて最も楽である。

八月八日 笹部君松本君山口君隣家の中学生をひきいて銭函に海水浴に出発す

八月十一日 夜銭函に海水浴へ行きたる連中帰舎す

八月十二日 夜笹部君松本君、十勝種馬牧場へ実習のため出発す。

八月十三日 当日より笹部、松本の両君不在となり、舎内物淋し、奥田、山本両君はテニスをなす外、沈痛に日を送る。

八月廿二日 時田君午前七時の列車にて帰舎す、之を以て第二番の帰舎よりとす、元気仲々応盛

八月廿五日 夜時田君と岡田君の土産開かる。

八月廿七日 夜矢田君と中村生にて決算を行ふ。

午後十一時の列車にて多勢君目白二疋を携へて帰舎、元気当るべからず、寄宿舍いよ※※活気生ず。

廿九日 多勢、時田、矢田、三君に中村生を合して四人にて定山溪へ早朝出発、豊平川をのぼる事七里にして定山溪へ達す。午前六時に出発しても午後二時に到着す 溪流の美と温泉の情緒とを味ふて夕方の汽車にて帰舎す。

卅日 波木居君帰舎、途中函館に立寄りて楽しき由、独語の東京に於ける公衆のなかりし事など其土産話の一つあり。

多勢、時田両君と中村生にて小樽を見物してより蘭島にて海水浴をなす、蘭島の景色の美、水の清き事、思はず快哉を呼ぶ。惜むらくは時間に余なく■■■わずかの時間より止

る事の出来ざりし事なり

廿日 山内君晝頃帰舎せらる。途中列車に事故あり、黒松内にて六時間余立往生をなしたりと、テニス、ラケットを片手に大信彦袋を肩にして帰舎したる、スタイルは盃し、□か。

九月十七日 午後部屋替及び組合せの変更を行ふ。

当日舎生一同藻岩山上にて観月会を催す。

文藝部は用事のため留守番をなしたためその感想を誌す能はざれば之を松本君に願ふ、当日余市に果樹園見学に行きたる為、一行より遅ること数時間、手提片手にウスラ覚の小路をたどり遂に頂上に達せる時、一行は帰路に付く、好奇心の■動により体こそ小なれ二十才の古熊と化し熊笹を分けて右に進む「熊だ」「なに居るものか」一同は逡巡す。而に□なしたる知りたる、余は人間になった。

「ナンダ馬鹿にして居ら驚いたぞもう少しで石を投げるところだった。」を葦山の産物は云ふ「何な悪戯はするものでないよ」と大人らしくも君が云ふ。矢田君と共に、山上に野営す。一人は彼の古巢寄宿舎に向ふ。

行十八名。札幌生活の記憶の一部を充したらん。寂莫たる藻岩山、夜煙にきらめく札幌の市街、頭上の朧月吾人に如何なる教訓を与しかな。

二十四日 月次会を行ふ、委員左の如し。

岡田玄武君、小野誠四郎君山田君小林君

御馳走は牛肉、その他西瓜トマトあり。

来賓として、北村氏、亀井氏御臨席下さる。

舎生の休暇中の話あり、来賓の話あり、一先づ閉会して後茶菓に移り一時迄で騒ぐ。

三十日 中村、今井両君、夜帰舎さる、楓林の用紙購入す（價五十七銭）

本学期委員左の如し、改選は二十四日に行はる。

会計部 波木居君、食事部 矢田君

運動部 多勢君 衛生部 梅津君

文藝部 時田君

十一月一日 四日余ぶりの晴天で、テニスをすることを得、夕、山縣君合宿あり來りて夕食を共にして帰る

二日 朝、鈴木誠志君、オショロに実験のため行かる。奥田君山縣君小樽の対校試合の選手として行かる。その成績は、山縣一個としては立派なりしと雖、全体として甚だ振はざりしと、午後、小野君五六名の舎生を引きつれて平岸に林檎園を訪れ、林檎、西洋ナシの土産を■す。

四日 午後四時半、中学生対舎生の庭球試合は中学生より申込によりて舎のコートに於て開かる。敵にも札師の選手あり、我に奥田君帰り来らず、病める熱三十七度幾分の山縣君に先鋒を頼む、その働目覺ましきものあり、メンバー及勝負左の如し。

中学生組

舎生組

| | |
|--------|--------|
| 小国兄、村上 | 山県、中村 |
| 西田、小国弟 | 小林、矢田 |
| 斉藤、工藤 | 山口千、梅津 |
| 皆川、高橋 | 奥田、山田 |

即、不戦二組、優退二組にて、スコルクの残敗をなさしめたり、夜、山県君の室にて祝勝コンパをなし、リンゴ及ブドウを味ふ。

五日 朝、本月廿日に行はるべき記念会の委員の発表あり、次の如し。

接待係 主任時田郁君 委員奥田君、多勢君、今井君、鈴木君

余興係 主任山縣汎君 委員笹部君、小林君、梅津君

食事係 主任矢田茂夫君 委員西山君、鈴木君、山口千君、小野君、山口九君

装飾係 主任山田彌三郎君 委員松島君、松本君、今井君、岡田君

会計係 主任波木居修一君 委員中村君

六日 午後中学生との庭球第二回戦を行ふ、メンバー次の如し。

村上、工藤 奥田、山田 西田、小国弟 小林、中村

高橋、小国兄 山県、矢田 皆川、斉藤 時田、梅津

大将組の戦は暮色暗くして球見えざれば、ドロンゲームとなる、つら※※思ふに中学生との戦、無意味にして時間つぶしなることを以て、今後止めることにせり、夜、西瓜の御馳走あり。

八日 此日午後一時出発にて定山溪遠足をなす。

行く者七名、日本晴の天空を祝し、途上、まだやつ早き、紅葉の山を愛し、又、小林君持参のビスケット、バナナ、菓子を賞し、小野、奥田、梅津諸君は草鞋、小林、波木居、多勢諸君は靴で跋涉して進む。四時半、簾舞に到着、先発、食事係、中村、矢田君の豚汁の馳走にあづかる。汽車で来る、笹部、松本、山口九、山縣諸君を合せて之より夜行して進む、片われ月、さへて、やうやく西に傾き、一隊の若人の声唯、夜路に動き行く、時九時に近からんとするや、忽にして灯影おぼろに湯気もく※※と上る夜の湯町に着く。一連の寮歌は、月見橋をとどろと鳴らして、ホテルの看板を落す所まで及ぶ、その夜、リンゴ、西洋ナシを食ひ、へぼぬけ、一二三四…等をし、暖く就寝

九日 ホテルの離れに自炊して食ふ朝飯のうまさ、みそしるの味、各々満腹して、八時半頃、炭酸水に向って出発、途中笹部君と別る、二里の苦しき山路こえて、辿りつける炭酸水を砂糖漬にしてやうやう賞味す、辨当にパンを食し、ナシを食ふ。かくして、定山溪停車場に一時半迄に皆帰着す。車中、トランプをなす、たま※※松本君、提議して曰く、今朝の多勢君の失敗を時田君、日誌に書くを忘れ給ふな、「一同出立せんとするや、大声に、紙！紙！と呼ぶ者あり」と、多勢君、云ふなく、おい、時田君、書くと驕らないぞと妥協案を持ちかくる等、騒々しく豊平に着く、電車に乗り、正五時歸舎す、秋の遠足、無事終了。

十一日 久しぶりに強き風吹く、細雨時々至る、夕方、競賣を行ふ。

中央公論 一円三十六銭也中村君、太陽 七一銭山田君、
タイムス 四二銭 矢田君 朝日 八〇銭 梅津君
万朝 六八銭 松本君

十四日 午前七時四十分の列車にて宮部博士歸札せらる、舎生一同停車場前に出迎ふ、先生いと元気に御健全と見受けらる。先生を迎へて舎の仕事は今後益ニ多忙となるべし、されど先生の元気を見て、我等頼る所あるを思ふなり、記念祭、招待状の事捗らず、明日でも遠隔の先輩だけには端書を送らん。

十五日 午後一時半より西田座にて賀川豊彦氏の社会問題講演あり、鉄道院の祝賀会あり、市は賑なり、夜、今井、多勢両君に端書を頼む。明日の手稻登山計画の用意をなす。

十六日 午前七時四十分の汽車にて軽皮に至り、光風館の登山口より登る、険しき路、痛く参らすものあり、此日晴れて絶好、山上も涼味なし、■に右を投じて戯る。一時半頃下山し、先頭松本、山口九、多勢三君は三時何分の汽車にて残九人は四時半頃の汽車で軽皮を残す。

奥田君は旅行に行かれて無し。

十七日 朝七時半より大掃除を初む、午前中に終りて、午後中島グラウンドに開かるる加軍対北大の野球戦を見る。十四対〇なり。

夜、奥田君帰る。

十八日 岡部庫彦君突然舎を尋ねらる。益々元気なり。北洋の快談を夜の再御訪問に期待せしも、不幸にして氏は止むを得ざる事のため夕食を舎生と共にして帰らる。氏の健康を祈って止まず。

二十二日 中井君和歌山縣の寄宿舎に移るため、今日退舎せらる。夕六時君のために送別会を図書室に開く。

二十三日 山口九君朝より定山溪のクラス会に出席し、午後五時頃帰らる。

二十七日 今日、豫科の発火演習あり、白石、月寒方面に行軍し、聯兵場にて演習し、白石開道にて牛乳を食みて帰る。午後五時なり。明日休業となる。夕食は、亀井氏を招き、小西婆や及其家族と共にし、小西の送別の宴となす。御馳走はトロロなり。今夜限舎を去る。石澤達夫氏より、小公子及故農学士藤田九三郎君小傳。梅津元昌君より内村全集第一巻を各寄贈せらる。

三十日 日曜日のこととて朝より飾付に忙し。なんとなれば例年の記念祭あればなり。四時より夕餐始まる。宮部舎長、北村卓爾氏、河村精八氏、村井梅次郎氏、亀井専次氏、小田切榮三郎氏、御臨席あり。中村君の挨拶に始まり、食事部の萃をこらしたる珍味を味ふ。鴨のすいひもの、焼魚、さしみ、リンゴ、羊カン、キントン、等めざましく、食後、祝の餅をたまはる。紅白にして大、とても直に平ぐべく見へず。六時半開会。中村君、奥田君、小林君、山縣君、笹部君の祝辞挨拶あり。来賓の方よりは亀井氏の御祝辞、小田切氏の禁酒禁煙の回想談あり、舎長の逸話に及ぶ。次に河村氏立ちて、舎の歴史について、今夕、出席能はざりし石澤達夫氏にかはりて語る。

皆々、石澤氏の不在を物足らず感じ、遠く茅ヶ崎に病を養療せらるる氏のために、祈る所あり。舎長も立ち給ふて先、石澤氏について語り、次に小田切氏の話を受けて、思出を語る。全員寮歌を合唱し（中村君作歌曲）、最後に舎長の発声にて、舎の万歳を三唱して会を閉じ、舞台をしつらへて余興に移る。尚、小松佐一氏の来臨あり。

余興左の如し。

尺八 今井君
皿まはし（野武士ノ権太） 笹部君
聖劇、日支親善古今の壽、 新入生一同（波木居君、矢田君、梅津君、今井君、多勢君、時田君、松島君、西山君）
まんどりん 中村君伴奥田君
各国民謡（鈴屋骨八） 鈴木誠志君
琵琶、石童丸（西山旭天、多藝無藝）西山君、多勢君
老人詩吟（飛入り） 小田切榮三郎氏
維新劇黒船（楡櫃クラブ）中村君、奥田君、小林君、山田君、山縣君、松本君、山口九郎君
女男浪五人男（余興部一同）多勢君、梅津君、笹部君、山縣君、小林君
笑劇破れ鏡（楽大一座）笹部君、山口千君、小野君、岡田君、鈴木誠志君（来年卒業生組）

福引

小田切氏の詩を左に載す。

祝青年寄宿舍創立二十四年記念祭

禁煙禁酒友 友祝廿餘年

回顧住時事 青春血類燃

常より早く終り、時十時半なり。村井氏、亀井氏、北村氏残りて舎生と共にへボヌケ、錢まはしをして遊ぶ。全部片付け終る時、十二時過なり。

当日の祝電及び賀状左の如し。

小野榮治氏、田中悦郎氏、小堀九平、岡田盛隆、伊達宗雄氏、徳田義信氏（賀状）

米山 豊氏、田口二郎氏、田中元次郎、植崎基氏（祝電）

諸氏の寄附左の如し。

金拾圓 宮部先生 金五圓 岡部康彦氏
金五圓 田中悦郎氏 全 田口二郎氏
金三圓 小松佑一氏 全 北村卓爾氏
全 小野榮治氏 金二圓五十錢河村精八氏
金二圓 五藤威夫氏 全 村井梅次郎氏
全 亀井専次氏

右合計金四拾貳円五十錢也

追加金二円也小堀九平氏 金五円也岡田盛隆氏

合計四拾九円五十銭也。

かくして廿四回記念祭も目出度閉じたり。同時に楓林第十一号生る。厚くして諸兄の熱心あふるる如く見ゆ。

三十一日 天長節、朝十時より祝賀式あり、歸りてピンポンの練習をタベの勞を醫す。夜、決算を行ふ。通常十六円十六銭五厘なり。

十一月一日 今日大学医学部醫院の開院式あり。

生徒全体に赤一ツ白二ツの大福もちを贈り来る。

午後は病院見物とて自由研究。夜甚だ寒ければストーブを焚く室あり、火鉢を入れる室あり。

四日 十勝の高橋節雄氏より、記念祭招待に答へて書状来る。金二圓の御寄附ありたり。

其他寄附金左の如く追加せらるべし。

金二圓 高橋節雄氏 金五圓大小島眞次氏

九日 中村君の脚のコロッケの御馳走、夜賞美す。

十二日 初雪。去年の日誌を繰る。六日後れたり。

唯、土曜日たること符合せり。寄附金追加左の如し。

金五圓 鈴木貞雄氏

二十六日 此日月次会を催す。午后五時より食事。亀井氏舎生と共に食事をせらる。牛鍋なり。七時より開会。来賓者、舎長、亀井氏及五藤氏なり。委員山口千君の開会の辞に始り、中村君の飯島君歓迎の辞、飯島君の挨拶あり。奥田君、無限大の世界の神科矛盾を説き、人間の入るべからざる世界に入りしたために、かかる矛盾生ずるなりと論及し、要するに吾人は余り不必要な所に深入りすべからざることを結論す。今井君の札幌に来る迄の経歴談あり、山県君、資本主義は社会進歩の一経過にして、終局に非ず。有終の美主義に非ざるを論ず。

笹部君、現代複雑社会の清涼濟として安房藩士の仇打の一非劇を語る。鈴木君の話ありて、亀井氏の論理整然たりと宮部先生の云はれたる總ての方面に応用せらるべき資本主義を難じ云々。但、結論は筆者之を失念す。

次に、舎長の御訓話を請ふ。先に中村君渡米の御話を請ひたり。先生質問を受けて答へんと云ひ給ふ。山県君、排日の模様如何と。先生答ふるに懇切、よく日米関係を理解することを得たり。曰く、米は、政治的に、ポータ的に排日を主張すると雖、個人的に、マーケット的には日本人を必ずしも排せず。否、寧ろ歓迎する所ありとシャトルに於ける邦人移民対農事試験場の実例を挙げ有益なるお話なり。又禁酒令のことについて御話を續けらる。薬用酒類の禁は二三日前の新聞の報ずる所、但今、自家用として、酒を造り用ふことは、黙認されてある故、ホップの値は上がる、酒用ブドウの値は高飛をする等の奇観あり。されど飲酒の風を家庭に於ても子供の前では示さぬらしいから、今の子供の時代になれば、米国は恐るべき国となるべきことを話されて了る。矢田君の開会

の辞、茶菓の配られるあり、愉快なる会を閉ず。

今日委員、山県君、矢田君、山口九郎君、山口千君

十二月一日 本日より洗面所に湯を入る。

七日 予科の学期試験発表さる。十五日よりなり。実科、専門部にも試験の行はるるあり。一同緊張を要す。

廿日 朝飯後鈴木誠志君一週間実習のために千歳軍千歳村に行かる。夜九時の汽車にて山口九郎君帰省。

廿二日 予科試験了る。本日、本年度最終の月次会を開く。委員は次の如し。松本君、笹部君、小野君、今井君

珍しき、しかも普通の材料をとりたる皿肉飯の御馳走なり。来賓として、小田切氏、亀井氏を迎へ、六時閉会。

試験その他の都合上話の用意なかりなるべしとて、抽籤五分間演説をなすに決し、その情況左の如し。

1、中村君（九月より十二月までの出来事）提出者の意のある所を大摺にして安田の死と原敬の死と平和会議のことを話す。

2、岡田君（雪の味）蓋し、円山のスキー滑走にて、首までを雪中に致した時の味なるべし。禅の悟りの如く、又何とやらの名句の何やらの陰の長さの如く、それ又、雪の味も然るか。

3、矢田君（谷底の雞）君暫時困じてありしが、やがて説くやう、百姓家の雞なるべし、迷ひて谷底に至れりと思ひ給へ。彼遂には死なん。人も住むべき所に住みまほしきものよと。

4、飯島君（ものもらひ）昔乞食ありけり、祭の時の収入の少きを嘆じ夫その妻に、人はも皮肉なるものにてある哉、ソコツチ、千両函が手に入るならば如何するや、吾は、金の椀を造りて、それもてもらひをせん、収入多かるべし。一銭入れんとする人も五銭にすべければ也。云々。

5、松島君（原敬）原も斬られて見れば、政友会に人なし。まんざらの男でもなかりしやうなり。

6、時田君（大正十年の想出）中村君の大体論に次いで私人としての想出をなす。大いなる事件として、

一、札幌に來りしこと、二、病める叔父の帰朝、三、彼の救はれざる死と。

7、山縣君（戦争か平和か）勿論平和を可とす。唯、その難たるを嘆ず。偉大なる精神、宗教に依らざれば、現実せなるべし云々。

8、山田君（普選と各政党）普選は、国民党、憲政会の主唱する所、政友は之を以て、尚早とす。果して尚早なりや否や。吾輩之を断ぜず。唯、うらむらくは、かかる重大問題の党争の材となることなり。

9、波木居君（浮世）人臣の榮を極めし原敬は一朝にして東都に醜屍をさらす。浮世は

ままならぬものでありまして、吾々が、こうして試験もすみ、のんきにしてみられるを
考えてみればその依て来る所を考へて感謝すべきでせう。殊に年末は債鬼なるものが横
行して、浮世のしゅら場が展開される事です。

10、多勢君（鍋焼うどん）鍋焼うどんは、学生生活に一つの煩悶を起すものなり。炭
とりに夜出ずれば、彼辻に曲りて去り行くを見ては人世の無情を感じ、舎のあたりを徘徊
する声を書いては一の立腹を感じず。彼は漸次、北進の傾向あり、東京都に黄金時代を
有したる彼は、札幌に全盛を極めたり。その数八十六増加の勢あり。おとくいは豊平の
中学生、教習所の巡査、曰く、近所の書生。

11、奥田君（過去一年間の最面白かりしこと。）君、悶々してしぼり出さんとすれども
なし。唯想へらく、多勢君の鍋焼うどん論一つありと。

12、小林君（年末）コンデの御歳暮をもらひて唯、深き林の中に進む心地するのみ。

13、笹部君（富豪と貧民）その関係の今と昔。今や轉倒して、貧民＝労働者の大きな
顔をする時代となれり。實際人間を此二者に分類するは、唯、**m.f.n**の異なるあるのみ。
しかも之人生の現象のみ。何んぞ實在たるべし。

14、西山君（赤）ロシヤの赤化を想ふ。之等外来危険思想に日本は感染せず、うまく、
同化する力あり。却て、政府さはげばその宣傳とも成る。当時は非常に危険視された。
しかし今や国論となった。大して新しい問題でもない云々。

此他諸君のものありたれど筆記者、筆記を遺失して記する能はず。梅津君の「植物園の
熊について」で終り、亀井氏の話あり。亀井氏曰く、物事は第一に **Systematic** だと云
って皮肉られるが……。何れ皮肉か？問題じゃ。

次に小田切氏のお話あり。面白き話振で酒禁から始り、氏のクリスチャンとなりし発端
を話さる。

さる、次第に物語るつもりなりと。之で終り、茶菓に移る。

此夜九時の急行で山田君帰省。

委員の改選あり、次の如し。

運動部小林君、食事部今井君 会計部山田君、衛生部西山君、文藝部山縣君

廿五日 朝松本君帰省さる

廿六日 午前、今井、多勢両君、スキー合宿に行かる。

廿七日 早朝四時頃から起きる人あり。餅つきのためなり。山口千君、小野君、殊に鉄腕
を振るひ諸兄の奮闘あつて晝中に了る。

卅日 石澤達夫氏午前八時廿分茅ヶ崎で逝去さるの報至る。舎生二日間の音曲停止、謹慎
をなして、哀悼の意を表す。氏は舎との関係最深き人、氏を失ひて、寂涼たる感あり。
氏の魂の恵まれたる召と、遺族の平安を祈る。

卅一日 スキー隊三角山に行くあり。夜は忘年のコンパを静に食堂に於てす。年越ソバを
食ひ、僅の人トランプをす。除夜の鐘を聞いて年をとりしを思ふ。矢田君、西山君午前
一時より円山神社に年越へ参りに行かる。殊勝の事なり。